

飛鳥

2015年  
盛夏号  
第187号

# かわら版

ASUKA KAWARABAN

発行所  
飛鳥出版室

発行人 永野 正将

〒780-0945 高知市本宮町65-6

電話 088-850-0588

e-mail:info@asuka-net.jp

http://www.asuka-net.jp



於 京橋商店街  
「第33回 平和セタまつり」

たましひは永久に生きるぞ草かげで  
皆の様子をみてぞ居るなり

楠瀬益實 著『心の表現』より

戦後70年特別企画

「たましひは永久に ~70年目の手記~」	2
あすへの歩跡 6	大澤重人 11
出版物紹介	12
キルギスタンからコンニチハ ㊦	氏原名美 13
おのころじま奮染記 5	田島征彦 14
催し物案内板	15
わが家の太郎 ㊦	永野雅子 16

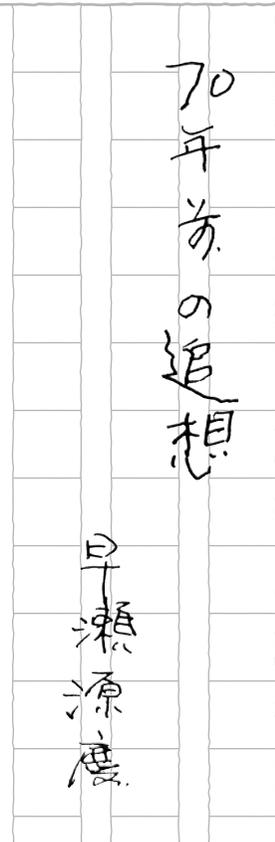
「いろいろかいり」「文章カレレベルアップ講座」はお休みします

「飛鳥かわら版」は、あらゆる世代の自分史・個人誌作りを応援します。

# たましひは永久に

とは

70年目の手記



下の孫が八才、小学三年生になる。七十年前の私の歳だ。昭和十九年頃だと記憶しているが、戦況も厳しさを増している頃、升形から南へ築屋敷の土手迄の東側、高知城外堀沿い（金子橋が掛

かっている）の家屋を空襲の際、火道を断つため解体した。その解体した家屋の釘その他金属類を抜き取り回収するため、小さな学徒動員に召集された。小学二、三年の子供達に作業をさすのだから

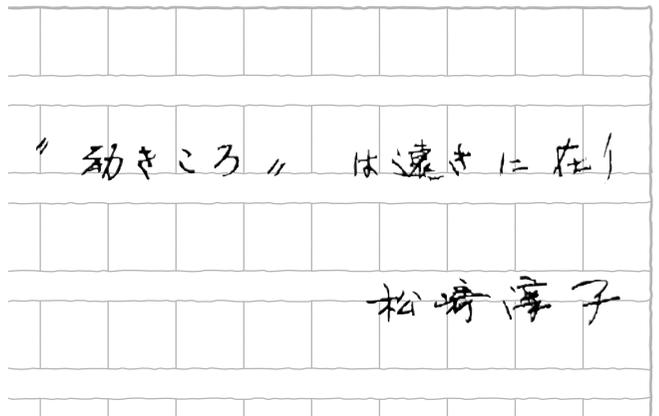
怪我などしないかさぞ大人達は心配した事だろう。しかし私達は楽しく作業をした事を覚えている。当時は、お寺の仏具類、釣鐘、半鐘迄供出させた時代だ。小国民の勤労奉仕など当たり前的事だった。折角家屋を解体し火道を切っても七月の空襲では何の役にもたなかったが。山内の下屋敷（現・三翠園）東の堀に投下された爆弾に下肝を抜かし、高知空襲の最中、B29の巨大な影が我が家の向こうに真つ逆

さまに墜落したのを目撃したが音は聞こえなかった。同時にもう一機、県庁庁舎の裏山にも墜落、双方共翌朝のん気に見に行った。本丁筋一丁目、四国銀行（上町）の東に墜落した残骸は八月十五日敗戦後迄残されていた。県庁裏山の墜落現場は誰に尋ねても知らないと言う。夢ではなかった筈だが……。

八才の孫達はコンピュータゲームには滅法強い。ただ、鋸も鉄鎚も使えない。

（高知市・79歳）

昭和のはじめ、小学一年の頃。外で遊んでいたら、母からお使いを云いつかった。「お砂糖買ってきて」「はい」。すぐその雑貨屋へ走る「お砂糖、半斤頂戴」——半斤とは六〇〇グラムの半分。今思い出しても、あの頃ってなんと慎ましい暮らしだったか。また、月に一回ぐらいは、少し遠いお肉屋へ。「牛肉一〇〇め（一〇〇匁は約三六〇グラム）頂戴!」。それは、家族六人の夕食の鋤焼き用。これに豆腐と赤ごんや葱をドッサ



り入れて……その匂いはたまらなかつたネ。今なら肉の量は二倍だけど、あの頃は幸福感いっぱいだった。

着るものは、姉たちは、お下がりが多かったようだけど、末っ子の私はツギハギかなわず新品が多い。新調はお正月とか、ご神事。冬は寒くて、手はかじかみ、霜焼けの子は多かった。梅雨の蒸し暑さは格別で、校長先生の訓話で「この季候だから米が育つ。我慢しようネ」と云われ、納得していた。お昼になると、小使いさんが木桶に湯を満たして、オークで担いで教室へ。お弁当の蓋で「アチチ！」と云って飲んだっけ。お弁当は白いご飯に卵焼き。それも一個だから、姉から「塩をよけ入れ」とご飯が余るぞね」と教えられ、必ず沢庵と梅干しも。でもそれはまだ良い方。山林の子は、下食い、といってお芋で下腹を満たしてから食事をしていたらしいから遊びはおはじき、おじゃみ。時には学校ごっこ。男の子の取っ組み合いの喧嘩は見ただけど、男女ともイジメはなかったよネ。

こんな日常にハレの日も訪れる。お正月には家毎に祀り物やお節を整え、晴着の装いで初詣に。夏

と秋の氏神様の祭の夜はアセチレンの匂い漂う夜店の並が境内を歩いて、ラムネやアイスクリンを買って、家で魚の押し鮎など作るけど、大きなお宅では座敷に皿鉢を並べて、道行く人も上がり込む。これが、婚礼やら還暦ともなれば、襖をとり拂つての「大客」になつて、よさこい、だけじゃなく、式三番も謠われたから、父も扇子に詞を書いて、練習していたっけ。喜多でも観世でもない合

が、こんな平和な暮らしの裏側では、厳しい国情が進んでいた。満州事変、上海事変——そして小学生になると校長先生が講堂で「国際連盟脱退」——それってナニ？ それからの日々は、兵隊さんを日の丸の旗の波の中で送る。暮らしては、米の配給制、生活物資の切符制、金属回収と厳しさを加す。昭和十六年の日米開戦で更に生産人口激減、女学生の制服はモンペと下駄に変わり、勤労奉仕の毎日。

昭和十八年の冬、東大をはじめ制服姿で学徒出陣。翌一月には女

子にも挺身勤労令が出て私は東京の医学研究所へ。三月の卒業式に帰高して驚いたのは、なんと同級生五十五人が広島県下の軍需工場へ。下級生たちも本州各地の軍需工場へクラス毎に派遣されるとの状況。彼女たちに家から届く荷物には、蝗の佃煮、蚕の蛹の干し焼が入っていたとか。衣食は極限状態に追い込まれた。私の兄も姉達の夫も全員が戦地に。幼な子を残して！。

国土の荒廃は極限に達し、食糧はなく、結核は蔓延するなか、国は全国に医学専門学校を急造した。その一つが高知女子医専。母は「女も手に職を」と背中を押してくれ、入学したが、程なく終戦！大混乱のなか、地球的規模での「力による征服の歴史を終えて、人権の地球へ」との合意で、国際連合が生まれた。それは日本の夜明けでもあった。この大きな變動の顛末すべてをこの目で見る衝撃は、はたち、の未成熟な脳細胞にとつて大きく、その後の自分史の起点となった。

絶対に、「今を戦前にはすまじ」と。

戦争は人間と鬼にする

昭和十九年

昭和十九年、警戒警報のサイレンが大阪の街を揺るがす。少し間をおいて空襲警報のサイレンに変わる。或る日を境にサイレンの音が短く早くなってきた。

私は十三歳のときに両親と死別、四歳と十歳の妹と共に大阪の街中にて肩寄せあつて生きていた。

年齢、学歴を詐称し薬品会社で働いた。配給米は三人で一ヶ月三合位、糠を入手し水でこねてお好み焼のようにして妹に与える。「いくらかんでもノドを通らない」と泣き出す始末。本当に食べ物がなかった。

或る日、友人に誘われて淀に大根の買い出しに行った。農家で大きなおにぎりを出してくれた。食べたふりをして大根葉で包みポケットに入れた。大根といえども闇物資なので見えないように風呂

敷に包んだ。電車の中では見廻りの警察官に見つからず安堵。誰もが最近お目にかかれない貴重な葉付の大根。人目につかぬよう風呂敷に包んで隠し持って、いつも優しくしてくれるご近所に配った。みんなの驚いてよろこぶ顔がうれしかった。ダシも醤油もないので塩煮である。おいしい。葉っぱの緑がおいしい。

翌日、巡査が二人勝手に戸を開けて入ってきた。一人が「匂う」と言った。何のことか理解できない。もう一人が「やっぱり大根やこんな葉っぱがあったでえ」鍋のフタをとって「仰山あるなあー、どないしたんや」私は貝になっていた。「親は隠れとらんと出てこんか、おいこらあー」「親はいません」と言うと、一人の巡査が手錠を出して見せた。野菜の配給は

腐った南京か芋類。青菜など誰も見たことがない。大根葉が落ちていた見せしめに罪人として私に手錠をかけた。妹が大声で泣いた。二人の巡査は鍋の大根を手掴みで食べ「今度闇やつたらぶた箱だぞ」とおどして帰っていった。

「今日は空襲はありません」或る晴れた日曜日、まことしやかなピラが配られた。人々は三々五々情報を信じて淀川の堤防に足を運んだ。堤防にはヨモギ、はこべ、よめ菜やのびるなど食せる野菜の宝庫である。大人も子供も笑顔で楽しんでた。私も誘われたが大根騒動で疲れていた。

昼すぎ、いきなり空襲警報のサイレンがけたたましく鳴った。間髪を入れず艦載機が空いっばいに飛来した。低空で一対一の狙い撃ち。誰も助けることは不可能。逃げることも隠れることもできない堤防だ。地獄そのものの血の海となりデマを信じた正直者が大勢命を落とした。

食べ物のない空しさ、大阪の街中には草一本もない。子供はコンクリートのかけらでも口に入れる程食べ物がないのだ。

「防空壕は各自の家で作れ」隣組長の命令。そんなこと言われても作れない。夜中の空襲に備えて私は電気を点けて寝ることにした。過日サイレンを知らずに眠りこけ恐ろしい思いをしたからだ。大体空襲は夜が多い。が、大阪旭区都島、京橋が火の海となったのは昼だった。突然の空襲に妹を引っ張って他人様の防空壕に逃げ込ん

クリートのかけらでも口に入れる程食べ物がないのだ。





女学校の最上級生になった年、昭和十九年の秋、学徒動員で学業を捨て、本人の意思は無視し、家庭の事情も考慮されることなく、殆ど全員が京阪神の軍需工場へと送られました。それは、私達満十五才の秋でした。

私は、その年の七月に突然父が病死して、家中、まだ悲しみに打ちひしがれている頃でした。母もショックで床についてしまっているような家庭の状況だったので、私は心の中で泣きながら家を出て、担任教師に引率され、高知駅へと向かったのです。

高知駅には市内にある各々の女学校の生徒が教師に引率されて集結しました。そして、夜行列車に乗せられ、京阪神の工場へと送られたのです。県境まで、各駅毎に、家族達が集まり、たいまつを焚いて、「お国の為に」と無言の見送りをしていていました。

やがて私達の学校は兵庫県の網干駅に着き、近くにある真空管の工場へ到着しました。その日から翌年の終戦を迎える日まで、毎日毎日お国の為に軍需品を造る仕事に青春を捧げて来たのです。

私達は育ち盛りの頃でしたから、粗末な食事では、お腹がすいてす

いて、辛かったことや、夜になると、それぞれ故郷に向かって手を合わせて床についても、家族が恋しくて、布団の中にかくれて泣いたことなど、一生涯忘れられませんでした。

私達が一番のたのしみであった食事も、次第に量が減り質も落ちて行きました。最初は丼に盛られていた雑穀入りの御飯も、だんだんとへこんで少量となり、おかずも、肉や魚はほとんど見られなくなり輪切りの大根などの野菜が少し入っているだけとなっていきま

した。食事が終わっても、まだ満腹ではなかったので、病気で食事の出来ない人が居ると、仲良しの友達はその食券をもらって、もう一度、食堂に行ったりしているのを見て、うらやましく思ったりしたのです。時折、故郷から干し芋などの食糧が送られてくると、自分一人ですべての食糧がねして、同室の友達に分け合い空腹をいやしました。

工場での仕事も慣れないことばかりなので、ガスの炎で頭髪やまつげなどが焼けたり、不良品の回収作業で真空管を砕いている時、ガラスの粉が目に入って出血したりしてけが人も出ました。私達の

造った真空管は半分以上不合格品だったと思われます。その為、私達はいつもその不合格の真空管を割って中にあるタングステンの回収をさせられたのです。

このような辛い日々が続くうちに、体調を崩す人も出て来て、私も脚などが腫れて、医者診察を受け、脚氣と診断されました。そして卒業式を迎えることなく故郷へ帰ることとなりました。教師の付添いもなく、友達と三人だけで心細い想いをしながら汽車に乗りました。家に帰れるという嬉しさよりも、帰り道の不安でいっぱいでした。汽車の旅の経験のなかった私達は、やっとの想いで岡山駅で下車し、宇野行き汽車に乗り換えて、連絡船に辿り着きようやく土讃線へと乗ることが出来たのです。

こうして、ようやく自宅に帰りついた私は、病気が治ったあと、農業要員という名目で、母を助けて農業に専念し、終戦を迎えたのです。

工場に残っていた友人達は、卒業後も殆どの方が終戦までその工場に働いていました。京阪神へ行った友達の中には工場が空爆で焼けて故郷へ帰った学校もあった

そうです。小学校の同級生の中に、学徒動員で行った工場で片手の指を全部機械で切り取られた人も居ました。

このように成人だけでなく、幼い子供や若者まで、生涯忘れられない辛い、悲しい想いをさせられる戦争は、二度と起こしてはならないと思います。

「平和」こそ人生の宝です。

(南国市・88歳)



# 戦争の記憶

片岡 堯

昭和二十年八月十五日、終戦の玉音放送を、私は疎開先の山村の庭先で聴いた。国民学校（今の小学校）の三年の夏、八歳の時だった。

「書いておかねば、消えていく」と言った人の言葉に励まされ、断片的ではあるが、幼い頃の私自身の戦争の記憶を七十年の節目に書き残しておこうと思う。

私の父は大学を卒業して結婚、文部省教員として採用され、初任

地が沼津であった。従って私は父と母の間に沼津で出生した。その後父の勤務地は静岡、名古屋と移った。

太平洋戦争勃発の翌年（五歳）守山町の和進幼稚園に入園。園庭には猿雉犬を連れて鬼退治に行く桃太郎の大きな石像や、園長ご自慢の三連のすべり台があった。

男子、女子組で約百名、担任は永谷先生。後に聞くと、空襲の時直撃弾で亡くなったとか。若くて優しい先生だった。

最近、吉村昭氏の随筆『オレンジ色のマフラ』をたまたま読んだ。（文春文庫）「開戦翌年の昭和十七年四月十八日に飛来した東京初空襲の米軍機を目撃した。中学三年生の折の記憶である。爆音がして、見ると迷彩色をほどこした双発機が近づいてきた。驚くほどの超低空で、胴体に星のマークがえがかれ、機首と胴体に機銃が突き出ている。機風の風防

の中には、オレンジ色のマフラを首に巻いた二人の飛行士が見えた」

私にも幼稚園の頃、見慣れぬ飛行機が超低空で頭上を飛び、西洋人の飛行士が乗っけていてただ呆然と見送った記憶がある。近くには連隊があり、川向うは軍需工場だったという周辺の環境を考えれば、偵察に来ることは十分考えられる。十歳年上の吉村氏は日付だけでなく、マフラの色まで憶えているのはただ驚くばかりである。歴史小説家にはかなわない。

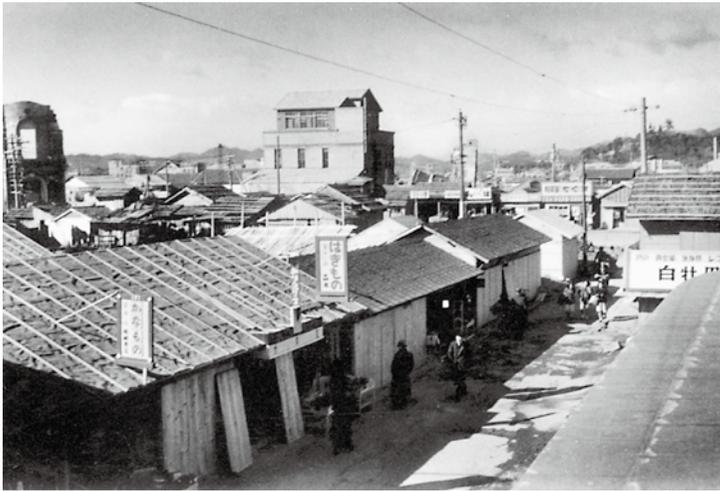
卒園して、名古屋城のすぐ下の大成国民学校に入学。一学期が過ぎ父は出身地である高知の連隊に応召され、私達も母の実家（愛宕町）へ移り住む。江の口国民学校に転校。当時ゴム底の運動靴は品不足で、入荷した都度クジ引きで配給された。私はクジ運の悪い方で、最後の端に当たった。二、三日履いたら底がバクリと二つに割れた。

三年生の七月四日、高知大空襲。近くまで火災が迫ってきたので、皆が防空壕を出て久万川の堤の方に逃げた。途中火傷をした人々が呻いていた。白い機体が地上の火を映して赤く見えるB29が、頭の上で焼夷弾を花火のようにバラまいた。腰がくだけた。誰かが「真上で落ちたのは大丈夫、前へ落ちる」と叫び、気をとり直して逃げた。田んぼ道を走っていると女の人が倒れていた。不発弾の直撃で頭が割れていた。久万川まで逃げて、燃える高知の街を身体を震わせながら眺めていると、隣に



いた従姉が「兎が焼け死んだ」とシクシク泣きだした。私も初めて悲しくなった。

勇敢にも火の中に留まった祖父の消火活動のお蔭で、家は戦火を免れた。翌日には敵が上陸してくるとデマが飛び、急いで高岡郡越知町から松山寄りの市ヶ谷の遠い親戚を頼って疎開した。野老山国民学校に転校。



山村生活は四十日という短い間であったが、初めてのことであり何もかにもが新鮮で未だに記憶に残っている。学校へは小さな峠を一つ越えて集団登校した。校庭で上級生が長い大きな蛇の尻尾を持って振り回し、地面に何度も打ちつけてやつつたりした。家では軒下に据えられた石臼と足踏み式の杵で、二三人が軒からぶら

下がった縄につかまり、踏んでは放して米を搗いて精米するのが子供たちの仕事だった。おばあさんの炊いてくれる匂い米の美味しかったこと。仁淀川にそそぐ谷川のせせらぎが一晚中聞こえ、温泉宿に泊まっているような感じだった。

谷で仕掛けて獲ったつがに汁も、湧き水で冷やしたトコロテンの味も未だに忘れられない。

ある日、私達の通学路でもある山道を行く人を、通りかかった敵の戦闘機がくるくる舞いながら遊び半分機銃掃射をして、飛び去った。幸い下手くそで無事だったけど、ひ

どいことをするものだ。終戦間近のことである。

終戦時高知の連隊に残っていた父が、名古屋の学校に復職すること、又転校手続。名古屋も焼野原でとりあえずの住居は郊外の守山町へ。守山国民学校の担任は大村先生。四年生からはやつと見つかつた中心地の中区中ノ町へ。栄国民学校に転校。担任は木村先生。(大村先生も木村先生も、生まれの子供さんを何故か「博彦」と命名した。二人の博彦君がどんな人生を歩もうと私に責任はな

い) 昭和二十四年、新学制施行。その前年に父は高知大学に奉職するため郷里に帰ることを決めた。私の方は又転校。六校目である。附属小学校をやつと卒業した。

六回の転校にもかかわらず、一度もいじめにあわなかったとは、今の時代では考えられない。戦争という特異な時代背景の所為だけでもないと思うが、今が平和すぎるのかしら。

またその間、戦時下の混乱の中、学校、住宅の手当て、交通手段の確保、手続き等々、母は苦労したに違いないが、私には全てがスムーズに運び、どうやって連絡を

つけ前をあげていったのか不思議でならない。

都会に行くにつれ、人間のたくましき、一方みにくき、あわれさも強く感じた。身近な人も自分自身も、傷を負い血を流すことなく、悲惨さの中にどっぷりつかつてあがくことも、ひもじい思いをした覚えさえもない。日本全国が焦土と化するあの戦いの真つ只中であつて、幸せなことであつた。

私は、高知、名古屋、東京しか知らないが、その中に身を置いて自分の眼で見、肌で感じ、復興のめざましさを目の当りにしてきた。焼け跡から次第に立ち上つていく東京タワー、虎ノ門の霞ヶ関ビル、新宿駅西口周辺、浄水場跡の変貌。そこらこゝら至る所に色濃く戦後が残っていたが、それらが一掃された。社会的にも私自身の中でも戦争(それに含めて戦後)が完全に終わった。

昭和三十九年東京オリンピック・パラリンピック開催までを「戦争の記憶」にしたい。

(高知市・78歳)

七十年前の八月十五日、小学三年の私は、福島県の小学校の校庭に並んでおりました。

ザアザアと雑音が入ったらジオのスピーカーからは、今まで聞いた事がないような言葉が時々聞こえていました。先生から「天皇陛下の話だから、黙って聞くように」との注意があり、分らないまま、暑くて倒れそうになりながら並んでいました。

宿舎に帰ると、今まではいつも怒鳴りながら指導をしていた男の先生が、声をあげて泣いている異様な中、戦争が終ったと言われ、なにか自分の中でも変ってゆく事を小さいながらも感じておりました。

この日より、八ヶ月程前の寒い夜、私は東京の上野駅から汽車で集団疎開先の福島へ出発してしまいました。

母と別れ、心細い思いで窓から見た夜景は、あちこちに火の手が

甲藤徳子

上がっており、その中を走る夜汽車に乗っている自分は夢の中に見えるようで、不安で不安でたまらなかつた事を覚えています。

疎開中にはいろいろな事がありました。家に帰りたくて集団で夜脱出して駅まで逃げて、先生に引き戻されたり、又若い女先生が大浴場で咯血して、私も桶を持って血の海の中をウロウロしたりと異常な体験をしました。女先生は、その夜、息を引きとったようでした。

小さい時でも心に残る事は、断片的ですが、一生忘れる事なく、胸にトゲのように残っています。今まで、戦時中の事は文章にした事はありません。思い出したくない気持ちが強かったのでしよう。七十年経った今、飛鳥さんの呼び掛けにペンを取った次第です。戦争は地獄です。

(高知市・78歳)

戦争の体験記

戸田起子

燈火管制下の広の町は暗かった。午後十一時、総員起しの声に起きて縦四列に並んで歩いた。途中、上官に逢うと「敬礼」と小隊長が言った。全員右を向いた。上官も

敬礼を返してくれた。



職場につくとタイムカードも無かつたので自分の名前を裏返しにして下りて行つた。検査係は三階だった。エレベーターに乗って三階に下りるとそれから忙しかつた。ナット、ボルトの検査は、検査通りにできていればよかつたが、計算通りにできてない物は査定台に悪い所を書いて出しておくとか検査係が査定し○×を書いていた。一番大変だったのは点火検査だった。一ミリの千分の一の内径を検査し、ゲージに合わせて、合わなければ悪い所を書いて査定台に出しておくとか検査官が○×を決めていた。少しの間隔が検査通りになつていないと油がもれて発動機が爆発する。緊張する検査だった。月給は二十六円だった。事務所の仕事に変わったらと言ってくれたが、

同級生と別れるのがいやだったので断った。三交替制だった。

受付に「母キトク、スダカエレ」の電報がきていた。十月三十一日に母は亡くなっていった。広駅から一人、燈火管制下の呉湾をどうか母が生きていてくれますようにと祈りながら岡山のプラットホームに降り立った時は、一人でさみしかった。宇野行きの汽車に乗り、高松に着いて棧橋を祈りながら走り続けた。やっと汽車に乗り込んだら、土佐弁も聞こえ、ホッとしました。

須崎に着いて原の義明さんの舟に乘せてもらって矢井賀についたら葬列はもういかなかった。母の死に目に間に合わなかった。トランクを放り出して葬列を追ったが、間に合わなかった。兄は東京の国立の師範学校に在学中だったので、一日遅れて帰ってきた。

母のいない家はさみしかった。思えば休暇中、母の心づくしの五月寿司と柴餅を作ってくれて、母の夏の服を二枚縫ってやったら着心地がよいと喜んでくれた。これが母を見た最後になってしまった。母の供養の為、毎日毎日お経をとなえた。四十九日が済んでからは、食糧の調達は私の肩にかかった。

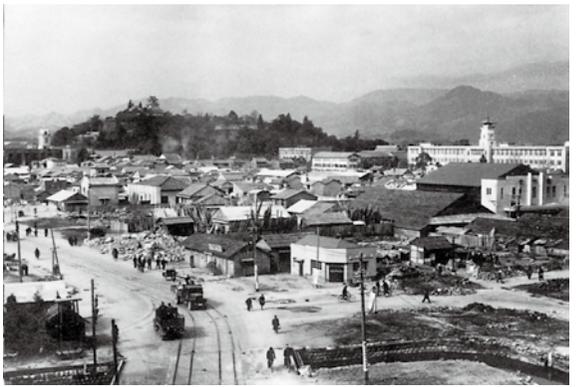
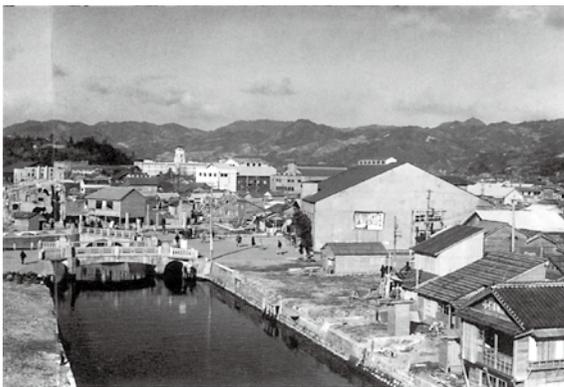
二つ違いの弟妹達がいた。この子達を死なせてはいけなないと心配だった。

弟は漁師になり魚の配給を受けて私が三時に起きて近所のおばさんに連れて行ってもらって米や麦と交換する毎日でした。売れない日もあった。買ったたかれた日もあった。米の配給は代替としてメリケン粉、キビ粉と変った。キビ粉とメリケン粉を交ぜてパンを作り、個数も一人二個と決めていた。衣料品、塩、すべて統制されていた。

苦しい時代、よく子供達が死ななかつたと思った。下の弟は九歳下の妹は五歳だった。兄弟の中でも下の弟と妹が順調に育ったのは不思議だったと思う。

今こうして、その時代の事を思い出すと、涙がひとりでも出てくる。ふいてもふいても涙は止まらない。戦争はいやだ。二度と戦争をおこしてはいけない。大変な時代だった。今、老境に入ったが、あの世からはまだ呼び出しはこない。生きているのが辛い時もあるけれど、生きていけばよい事もある。元氣を出して歩いてゆこう。

(中土佐町・88歳)



〈特別企画に寄せて―出版室より〉

戦争を経験していない私たちにとつて、「戦争」は学校の社会科で習うほんの数ページの中の世界であり、それは、半ばフィクションを見ているような感覚とも言えるかもしれません。

時が経つほどに、体験や当時の暮らしを自分の記憶として語れる人はいなくなります。もしも、誰も何も受け継がないまま消えてしまったら？ それは「なかったこと」と同じことになってしまうのではないかと――

消えてしまうことが、とてつもなく恐ろしいことに感じ、「いま、残さなければ」という思いが少しずつ強くなりました。

私たちの呼びかけに、たくさんの方が当時の記憶を綴ってくださいました。人によって、戦争をめぐる記憶は様々です。ただ反戦を叫ぶのではなく、当時の市井の人の生活――荒廃を極めた戦時下にあつても、その中で強く生きた人々のことを伝えたい。少しでも当時の「日常」をお伝えすることができれば幸いです。

それぞれの筆致の間に揺れ動く想いをそのままにお届けします。



# あすへの歩跡

6

大澤重人

「高知の女性史を出したい」

二〇〇三年、「高知男女共同参画センター・ソレ」からそんな企画が出された。道付けをした県立歴史民俗資料館長だった坂本正夫さんが「女性ばあでやりや」つてを頼って、松本さんら一七人がかき集められた。現・元公務員、編集者、大学教員など職業も、年齢（八〇〜四〇代）もばらばら。ほとんどが初

対面だ。「聞き書きだったからできるんじゃないか」。八〇歳以上の女性から一代記を聞くことが決まった。坂本さんが釘を刺した。「語り部を頼むには、役場で聞いたらいかん、畑で聞かないかん」自身は女性史の概略執筆と年表の担当になった。他のメンバーは口コミで探した人たちから話を聞いた。集まったのは九〇人分。そこから「大変でした」。素人が

## 女性の歩んだ人生に光

高知ミモザの会代表

松本瑛子さん(74)



まつもと・てるこ  
春野町（現・高知市）生まれ。高知大文学部（当時）卒業。2002年の県立高知小津高までの38年間、高校教諭（地歴・公民）。在職中の92年、鳴門教育大大学院（徳島県）で学び、修士課程を修了。高知市在住。  
【写真：手がけた3冊を前に】

よ」。〇五年に出版にこぎつけたのが、『ひとくちに話せる人生じゃない』。戦争を挟んで苦労の中を歩んで来た女性たちの人生に光を当てた。学びたくても女性はなかなか学校に行けなかった時代だ。

予想外の二四〇〇部が売れた。編集・執筆をした女性たちは、国際婦人デーの象徴の花にちなみ、「高知ミモザの会」と名乗った。〇九年には『戦地から土佐への手紙』を出版した。出征先から故郷へ届いた手紙を、妻ら遺族のメッセージとともに収録した。「社会科教員時代にこんな身近な人の資料が欲しくて」と狙いを話す。「子どもを頼む」「両親を頼む」「お前のことばかり気にしている」とつづる兵士の素顔に感動した。会の代表に選ばれ、自身も取

材に出向いた。その行動力と引率は他の会員も認める。

一三年には、過疎で廃校が相次ぐことに注目し、卒業生の思いをまとめた『かつて高知県には709の小中学校があった』を発行した。「学校行事には、女性をはじめ、村中そろって参加した」。結果的に三冊とも、女性の生活史につながっている。「女性たちは悲しみや悔いも多かったろうけど、自分のできることを精いっぱいして、自分を認めて生きてきました」

四〇人弱のミモザの会は、それ自身が、活発な土佐の女性たちの活動史でもある。しかし多くが七〇代になり、今は女性を中心とした別の団体の活動を手伝っている。取材が終わると、「歩くのが好きだから」「飛鳥」から自宅へ歩き始めた。決して早くはないけれど、確かな足取りだ。多くの女性たちがそうやってこれまで歩いてき、これからも歩くのだ。晴れの日も雨の日も。

おおざわ・しげと

毎日新聞大阪本社編集局編集委員。高知支局に支局長、次長として計五年半勤務した。著書に『心に咲いた花―土佐からの手紙』。

# 産婦人科を退院してからの 母乳増量マニュアル

第4刷発行!

「母乳でわが子を育てたい」という母親の願いを長きにわたり支え続けてきた田村こどもクリニック院長・田村保憲氏が、母乳育児を正しく実践する手助けにして欲しいという思いで執筆した一冊

A5判 68ページ 本体476円+税



併せてこちらもどうぞ  
飛鳥の二大育児書

## こども

元・保育士はまだまさよさんの経験に基づく芯のあることばとはたけなちかえこさんのやわらかいイラストで綴る育児書の決定版

B6判変形 96ページ 本体762円+税



▼子どもが小学生の頃に、ブルーベリーの苗木を買った。世話をしないので中々育たず、片方枯れた(二本生りのため)して、ポツポツしか実をつけなかったが、今年はじめて大量に実った。週末毎にどんぶり一杯、夫が収穫してくれる。子どもと楽しむために植えたはずだが間に合わず、「おやじは何、やっきになって採りゆうが」ですと。(しま)

▼愛媛の映画館に4DXが導入されました。4DXは内容に合わせて席が動くなどまるでアトラクションのように映画を楽しむことができます。愛媛にはIMAXもあり、IMAXでは通常の3Dよりさらに質の高い映像と臨場感が体感できます。お隣の県なのにこの違い、泣けてきます。(T)

▼暑い。もうほんまに暑い。毎年、夏になると髪の毛を着脱式にしたいと思う。取り外して頭皮までゴシゴシ洗えたらサッパリするやろうなあ。(上)

雑書き





うじはら・なみ  
高岡郡越知町生まれ。北大でロシア語を学ぶ。2001年からキルギスに在。国立ピシケク人文大学日本語日本文学科学科長。

## ところ変われば味変わる

### ～ 食材適所～

氏原名美

一昨年、娘一家が日本へ越していった。残された米の買い置き約五キロ、それが二合少々とはいえ未だに残っている。平らげるのに丸二年、我ながら呆れてしまう。

キルギスは天山山脈によって国土が南北に二分され、風俗習慣も南と北で色合いを異にする。食文化にしても、南のご馳走はパエリアに似た炊き込み御飯のプロフ、「やっぱりウズゲン米がうまい」という話になる。北では指五本を使って食べることから名のついた麺料理ベシパルマックが宴席の最後を飾り、毎日の食卓には手作りのパスタや麺が欠かせないから小麦の価格変動が井戸端会議のメインテーマだ。

しかし、プロフもベシパルマックも肉なしでは話にならない。炊き込み御飯の味を決める肉の塊と麺の上の山盛り肉が主役なのだ。プロフは羊肉次第だとか、ベシパルマックは味なら羊で勝負、格なら馬肉が最高とか、喧しい。南も北も肉あつてのキルギスだ。

一方、日本人はコメこそ命といったところだろうか。日本人会に「ふじん会」なる部会がある。夫の赴任

に伴ってキルギスにやってきた子育て現役の女性がメンバーの大半だ。私は懇親会に顔を出すこともないのだが、情報交換のためのメーリングリストには載せてもらっている。ある日「皆さん、お米どこで買ってます？」というメールを発端に、入れ替わり立ち替わりのコメ談義が始まった。

驚いたのは、お米の味に執着しているのがハンバーガーにフライドポテトで育ったようなうちの娘と同世代の人たちだったことだ。「和食の調味料も食材も韓国シヨップに並んでいるし、豆腐やモヤシもバザールで買える。なのに、日本米がない！」と悔しがっている。コメの種類に合わせて調理法を変えようとは思わないらしい。日本に育ったものには、コメそのものよりむしろ炊き上がった「おいしいご飯」に特別な思い入れがあるようだ。私は、和食に舌鼓を打つのは日本に帰ったときがいい、鯉のたたきも鮎の塩焼きも、柚子も獅子唐も、その土地で食してこそだと思っている。「鯖寿司は高知で、正月に」と心に決めていくくらいだ。そんなわけで、コメ談義には口出

しせず、外野席で見物させてもらうことにした。話はまず産地ごとの品定めから。どこでも売っている中国米は安いけれど品質管理が徹底されていないから韓国シヨップの韓国米がお勧め、いや、韓国シヨップはすぐに売り切れる、だからロシアのクラスノダールやクバンスキー米がこの市場でも安くて美味、と次々と候補が挙がるが、当然タイの名前は出てこない。

次に、産地よりも炊き方だという意見に呼応して、秘訣伝授のやり取り。水入りの水で炊く、酒やニガリを加えれば臭い消しの効き目あり、もち米を混ぜたらパサパサの古米のようなお米もよみがえった味がした、と経験談に花が咲く。そして、「やっぱり日本のお米が一番よね」のコメントに全員同感、日本のコメならびに日本製炊飯器を褒め称え、一昼夜にわたるコメ談義は終了した。

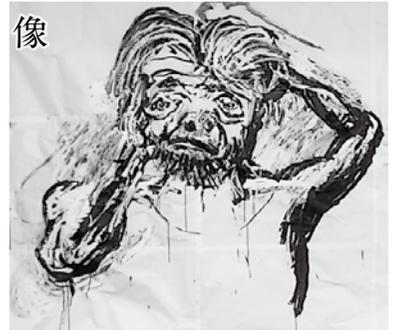
ふと日本に暮らす教え子たちの顔が浮かんだ。柔らかすぎる食パンに閉口し、ニュージールランドのラム肉の値段を知って驚愕し、こんな米ではプロフにならぬと溜息をつく。味覚は言葉の違いより厄介な異文化だ。

# おのころ島 ぼくは染

ふんせんき

田島征彦

## 5. 自画像



いた。染・清流展には、染色界の大御所たちが名を連ねていた。ぼくは日展が大嫌いだ。招待券をもらっても、行ったことがない。インチキくさい権威主義を憎悪していた。そんな日展作家と同じ壁に陳列されるなんて、ぼくの生きてきた道に反すると思っていた。しかし、今のグループは、最近、人間関係がゴタゴタして、皆の作品もダレてきて意欲がない。新しい展覧会で出発してみようかと思うようになった。迷いに迷ったが、思い切って染・清流展に出品することにした。

この展覧会は、繊維関係の会社の社長・小澤さんが、兵庫県立美術館長の木村重信先生に依頼して組織し、作家を選考したものだ。

おのころ島(淡路島)へ越してきて、十五年になるうとしている。ぼくは、今年で七十五歳になった。毎朝、鏡に映った自分の顔を見る。顔を洗ったり、歯を磨きながら、自分の顔を見つめていることがある。七十五年間、よくやってきたなと思いつつながら。

「染・清流展」に自画像を出品そうと思う。染・清流展は、多くの人生を変えたと言っているほどの展覧会だ。一九九一年に三十人の染色作家が選抜されて、京都市美術館で展覧会を開催し始めた。今回が二十回目(途中から会場を染・清流館へ移して、一年おきになった)になる。三十年前ぼくは、どこの団体にも属さない染織グループをつくって、毎年大作を発表して

高いものだった。ぼくが反抗ばかりしていた日展の重鎮・美大時代の恩師(?)故・佐野猛夫先生が「田島をどうか、大事にしてやってくれ」と何度も、小澤さんや木村先生に頼んだと聞いた。亡くなる直前にも、ぼくは佐野先生から「しっかりやってくれ」と電話をもらった。小澤さんは、染色のメッカである京都に、染色作品の常設された美術館のないことを嘆いて、

二〇〇六年に私財で染色専門の美術館「染・清流館」を創った。

染・清流館の九年間にぼくは、染・清流展以外にも、いろいろな作品を発表する機会をもった。特に今年で七回展を迎えた「祇園祭展」はぼくが中心になって、評判と信頼を与えてくれた。絵本作家としてだけでなく、染色家として認められたのは、染・清流館での発表の賜物だ。

七十五年間、生きてきた顔を染めてみよう。

入学が易いと言うだけで、京都市立美術大学染織図案科に入学した。染織に興味があったから、四年間は無茶苦茶だった。その上、更に専攻科(現大学院)へ進んだから、教師だけでなく、クラスからも激しい反発があった。古い染色に反抗して、型紙を刀で切らず、硫酸で焼き切ったり、友禅糊に運動場の砂を混ぜて作品を創った。それを、今回の自画像で使ってみよう。七十五年間、まともではない人生を歩いてきた顔は、決して美しくない。なんにでも反発して、反抗してきた人生だ。顔の裏側まで染めたい。二枚の布で構成した、生れて初めての型染の自画像は、十月に染・清流館で発表される。

たじま・ゆきひこ(染色家・絵本作家)

大阪府堺市出身。少年時代を高知県で過ごす。京都市立美術大学染色図案科専攻科修了。一九七八年『じごくのそうべえ』で第一回絵本にっぽん賞。最新作『ふしぎなともだち』で第二十回日本絵本大賞。

※「おのころじま」は淡路島の古代のよび名

# 催し物案内板 <8月~11月>



## 「以蔵と半平太没後150年」展

一龍馬・半平太・以蔵の目指した世界一

と き 開催中～10月2日(金)

開館時間 9:00～17:00 (※会期中休館日なし)

ところ 高知県立坂本龍馬記念館

入館料 大人(18歳以上)500円(20名以上団体 400円)

高校生以下、高知県・高知市長寿手帳所持者、療育手帳・身体障害者手帳・障害者手帳・戦傷病者手帳・被曝者健康手帳所持者とその介護者1名は無料

ニーマルイチゴ

## 夏休み企画展 土佐のカエル2015

と き 7月18日(土)～9月6日(日)

休館日 毎週月曜日(祝祭日の場合翌日)

開館時間 9:00～17:00(最終入館 16:30)

ところ 越知町立横倉山自然の森博物館

入館料 大人 500円、高校・大学生 400円、

小・中学生 200円

(各20名以上の団体 100円引き、70歳以上 250円、  
身障者手帳をお持ちの方は無料)

## 誰にもわかる 抽象画展

と き 8月22日(土)～10月18日(日)

休館日 毎週月曜日(但し、9月21日、10月12日は開館)、  
9月24日、10月13日

開館時間 9:00～17:00(入館は16:30まで)

ところ 香美市立美術館

入場料 一般 310(150)円・( )内20名以上団体料金

長寿手帳提示150円、身体障害者手帳・精神障害者保健福祉手帳・療育手帳の所持者とその介護者(1名)提示無料、  
高校生以下無料

## 第39回 高知現日書展

と き 9月1日(火)～9月6日(日)

ところ 高知市文化プラザかるぼーと 7階  
第1展示室

## 小高坂こすもす Autumn Concert 2015

と き 9月26日(土)

開場13:30/開演14:00

ところ 高知県立美術館ホール

入場料 500円

## 第69回 秋季いけばな県展

と き 9月26日(土)～9月27日(日)

ところ 高知市文化プラザかるぼーと 7階  
第1・2展示室

開館時間 10:00～18:00(27日は17:00まで)

入場料 前売券 400円 当日券 500円

## 第10回 森下照堂書作展

と き 10月16日(金)～10月21日(水)

ところ 高新画廊

開館時間 9:30～18:00(最終日は17:00まで)

入場料 無料



○月□日(木曜日)  
ゴーヤーに、やつと実がついた。山盛りのゴーヤーチャンプルーは夏の味。



○月△日(月曜日)  
今日は、網を張りました。グリーンカーテンで涼しくなあれ。

## 飛鳥の社窓から

飛鳥菜園  
観察日記



○月×日(金曜日)  
今日は、植え付けをしました。ゴーヤーとキュウリとナスとピーマンです。キュウリとピーマンは2種類あります。ゴーヤーはみんな食べないので、1株にしました。たくさんできるといいなあ。



○月☆日(金曜日)  
たくさん採れた!みんなで山分け。「デコキゆう」もできたよ!



○月◇日(土曜日)  
一番のりで、ナスができた。

印刷屋さんの  
「すったもんだ」



巷で少し悪いイメージで紹介されている「ドローン」ですが、「空の産業革命」と言われ、今後の発展を望む声が多いのも事実です。私が知る限りでも問題となった事件や事故のほとんどが操縦経験の浅い人のミスや、知識の低い人によるモラルの問題であると感じます。当社としても付加価値として取り組みたいところでありますが、現在の風評を考慮して控える方向ではあります。

ですが、知見と知識を高める為に、個人的趣味の範疇で「ドローン」を購入し現在勉強中です！近いうちに必ずお役に立てると確信しています！（永野正将）

右の写真より空撮の映像をARでご覧いただけます。



わが家の太郎 ③4

幸運

永野 雅子

太郎は七月七日で十歳になった。人間なら還暦位だろうか。お互いに唯一の健康法、散歩があるから元気でいられるのかもしれない。夏になって昼間の時間が長くなり、散歩も行き易くなった。夕方も七時半頃まで明るいから、仕事から帰って先ず出かける。今日も左にバッグ、右にリードを持っていつものコースへ。しばらく行く道と道路の真中に何やら団子状のものがこんもり。近寄ると犬のうんち。

こんな所に堂々と置き去りにするなんて何ということ、眉をひそめる。

大体、飼いだうんちを催してきたら素振りかわかるでしょうに、始末をする気がないのだろうか。太郎の場合は、以前にワンちゃん仲間から教えてもらったとおり、途中で落ち着かない様子でくるく

る回り始めたからバッグからチラシを出して待機。足を踏ん張ったらすかさずチラシを持って出てくるものを受け取り、ビニール袋に入れて完了。

地面に落とさないから何も汚さないし、ここぞというタイミングにサッとチラシを差し出しキャッチしたときは、ヤッターという快感(?)さえ覚える。

だから散歩用バッグは、予備の物など入れるので大きい。

先日、「今日はコースを変えようか」と、川沿いの道を歩いていたら、畠から出てきたおじさんが「奥さん、ナスはいらんかね」と、両手にいっぱい抱えている。「まあ、うれしい、頂きます」と私。「その袋に入れようか。案外大きいねえ」と言いながら、結局全部入ってし

まった。

おじさんもそんなつもりじゃなかったかもしれないし、私も「それほど頂いても」と思いながらバッグに入ったナスを今更取り出して返すのも憚られ、

「有難うございます。でもお返しがないけど…」

「かまん、かまん」と、貰ってしまった。

夕食はなすづくしにしようかね、太郎にも鶏肉と炒めて、などと足取りは軽い。

私の幼友達が、認知症になったお姑さんの下のお世話を、

「雅子ちゃん、うんこう、うんこうと言っていたら幸運になるよ」と言いながら、いつも笑顔でしていたけれど、この一件もひよつとしたら幸運なのかもしれない。

ながの・まさこ / 飛鳥常務取締役

おしっこは  
好き勝手やるのさ♪

